近世大坂の説教讃語芝居における演奏者

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>武内 恵美子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>日本研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>その他の言語のタイトル</td>
<td>未定</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15055/00000542">http://doi.org/10.15055/00000542</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
近世大坂の説教語芝居における演奏者

はじめに

近世後期の上流社会における説教語芝居の名目で歌舞伎の上演を行っていた大坂の宮地芝居を中心に、子供芝居の名目で説教語の上演を行っていた。説教語についてには、古くは木倉覚心氏や松本耕四郎氏によって考察され、室町時代の説教語の源流を基礎資料として、『日本の研究』第5号において挙げられ、『近世大坂演劇文化変容における下層劇団の歴史的役割』関連資料を紹介した。さらに、三井寺を中心として、近世後期大坂の宮地芝居に三井寺を取り上げた発表を大阪歴史学会で行い、その報告論文を『ヒストリーオンリー』に掲載されている。斉藤氏は、関連資料を紹介している。三井寺は、都市文化と芸能興行を基本資料として、演劇の歴史についての考察を加え、芝居の歴史的意義について論証した。}

武内 恵美子
1. 説教諸語花居概略

説教諸語座については査稿あるいは他の先行研究で詳述され
ているが、それらを参照されたいが、概略は以下の通りである。

山城国と近江国の国境であり、東海道・中山道の両道が通ってい
る交通の要所として、逢坂（逢坂関とも。現滋賀県大津市逢坂）が
ある。この逢坂の近江側に、三井寺宛下の閏蝕神社が存在する。

この神社については能成立あるいはその他の先行研究で詳述され
ているが、それらを参照されたいが、概略は以下の通りである。

山城国と近江国の国境であり、東海道・中山道の両道が通ってい
る交通の要所として、逢坂（逢坂関とも。現滋賀県大津市逢坂）が
ある。この逢坂の近江側に、三井寺宛下の閏蝕神社が存在する。

説教諸語座については査稿あるいは他の先行研究で詳述され
ているが、それらを参照されたいが、概略は以下の通りである。

山城国と近江国の国境であり、東海道・中山道の両道が通ってい
る交通の要所として、逢坂（逢坂関とも。現滋賀県大津市逢坂）が
ある。この逢坂の近江側に、三井寺宛下の閏蝕神社が存在する。

説教諸語座については査稿あるいは他の先行研究で詳述され
ているが、それらを参照されたいが、概略は以下の通りである。

山城国と近江国の国境であり、東海道・中山道の両道が通ってい
る交通の要所として、逢坂（逢坂関とも。現滋賀県大津市逢坂）が
ある。この逢坂の近江側に、三井寺宛下の閏蝕神社が存在する。

説教諸語座については査稿あるいは他の先行研究で詳述され
ているが、それらを参照されたいが、概略は以下の通りである。

山城国と近江国の国境であり、東海道・中山道の両道が通ってい
る交通の要所として、逢坂（逢坂関とも。現滋賀県大津市逢坂）が
ある。この逢坂の近江側に、三井寺宛下の閏蝕神社が存在する。
近世大阪の説教詠語芸居における演奏者

先述の通り、説教詠語座の興行は堺でも行われていたが、主な興行地は大阪の宮地である。上方歌舞伎の興行直前には京都も含まれるが、関西札の史料は古期であるので、京では行われなかったようである。本稿に於いて説教者・芸居は興行地である京で活動していたという。この理由もって大坂で歌舞伎興行を開始し、そのまま大坂を本拠地とし、と考えられる。

説教詠語座は、上方文化圏ではあるが、大坂と興行形態が異なっていたと考えられるので、本稿では、大坂の宮地で興行を行った説教詠語座の対象についていくことにする。

説教詠語と芸能者

説教詠語座は、上方文化圏にわたった者達を「説教者」と、あるいは芸能者と表記する。説教詠語座は芸能者に関して、神田氏が前掲論文で詳述されているので、そこから現象を捉えていくことにする。

説教詠語は、近世中期以降、歌舞伎興行と絡めて、把握できるだけに説文文・文楽・元禄・安政四年（八五七）の三度に亘って全国的な説教者調査を行っている。そのうち最後の回である安政四年の調査は、歌舞伎興行が禁止されていった天保改革の末期に行われた。
3.
素人と芸人の問題

新田次郎の論考で重要な指摘がある。「素人」芸能者の存在である。筆者は前稿において、説教語語座は芸能者集団であると述べたが、新田次郎は人形浄瑠璃の浄瑠璃座渡世集団であると指摘し、講の構成員を生み出す母体が素人芸能者であることを指摘する。

説教語語座も素人芸能者と不可分な関係があるのではないかと

述べられ、説教語語座の構成員ならず説教者を玄人とすることが

疑問を投げかけられた。地方に居住しながら因講の太夫・三味線と

師弟関係を結んだ門弟の多くは素人であろうと推測できること、そ

の素人芸能者としての活動が発展する交流、弟子と素人との境界

に素人との不可分な関係があったことを指摘し、説教語語座は玄人芸能者集団であると。

このため、新田次郎の論考は重要である。
近世大阪の説教語芸居における演奏者

「関説丸社文書」には、燈明料と引き替えに免状等を交付して
きた説経者との関係が徐々に薄れていく傾向にあることがたびたび
記載されている。その是正のためという側面もあって全国的な調査
を行っているのであり、それは免状を求める理由が多かったから、あるいは以前
交付された状態のまま説経を行うことが多かったから、ある
あるいは三味線音楽が発展途
上にいった時代とはともかく、ある程度興行が安定しジャングル化が進
んだ時代ではもっとも、あるければ免状が有する素人が多く存在するのではないか。
素人から素人へ境界を越えて、素人として
しないで出演しないのではないか。それゆえ「素人会」という場が
存在するのである。もちろん、素人と素人の一線を越えて、素人の舞
台を築いた状況で、すでに素人が非素人として捉えるほどで
ある。門付のようにその境界線が曖昧なものであって、その技芸
を以て業をたてる数人は素人と見なされる。それ故の免状や集
札であり、集団としての機能なのである。
4. 説教語座に出演した演奏者

それでは、具体的に説教語座に出演していた演奏者はどのような人々であったのか。神田氏が挙げられているように、「関隆丸神社文書」中に若干ながら芸能者名が記載されているが、「関隆丸神社文書」の文脈を考察するために、演奏者について考察してみた。

文書が見られるとは限らないが、演奏者の中には、表に見えない演奏者たちの記録がある。そこで、ある演奏者について考察してみよう。
出演者が変更になる毎に発行される配役表である。したがって、
配役表の有りが変わることで毎に発行される配役表である。したがって、
座本、名代、頭、頭取、狂言作者、振付などの興行関係者、演目、
演者名と担当役者などの興行に関する基本事項が掲載される。
ただしこの演者名と担当役者などの興行に関する基本事項が掲載される。
やる必要がある演奏者名の把握が必要である。また、演奏者名と担当役者などの興行関係者、演目、
振付などの興行に関する基本事項が掲載されるので、現在においては、どの演奏者が、演者名と担当役者、
振付などの興行に関する基本事項が掲載される。したがって、その情報収集とともに、演者名を記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているものが多い。
演奏者名が記載されているもの多い。
表1 安政五年八月十八日透露到的谣謠語座的芝居

<table>
<thead>
<tr>
<th>日期</th>
<th>芝居名</th>
<th>安政五年</th>
<th>六</th>
<th>七</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一</td>
<td>鎌山軒絵</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>五</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>伊達越中六</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>聖橋中wed</td>
<td>安政六</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>吉日</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
<tr>
<td>五</td>
<td>吉日</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
<tr>
<td>六</td>
<td>吉日</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
<tr>
<td>七</td>
<td>吉日</td>
<td>安政五</td>
<td>六</td>
<td>六</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2 說教謠語座の芝居

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>日</th>
<th>地点</th>
<th>芝居名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>万延十</td>
<td>万延十</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>万延十</td>
<td>万延十</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>三</td>
<td>万延十</td>
<td>万延十</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>四</td>
<td>万延十</td>
<td>万延十</td>
</tr>
<tr>
<td>五</td>
<td>五</td>
<td>万延十</td>
<td>万延十</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3 吉日

<table>
<thead>
<tr>
<th>日期</th>
<th>芝居名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一</td>
<td>鎌山軒絵</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>伊達越中六</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>聖橋中wed</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>五</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>六</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>七</td>
<td>吉日</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表4 說教謠語座の芝居

<table>
<thead>
<tr>
<th>日期</th>
<th>芝居名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一</td>
<td>鎌山軒絵</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>伊達越中六</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>聖橋中wed</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>五</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>六</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>七</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>御霊社内</td>
<td>御霊社内</td>
</tr>
<tr>
<td>---------</td>
<td>---------</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>二</td>
</tr>
<tr>
<td>一</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>九</td>
<td>八</td>
</tr>
<tr>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>暮雲佐倉曙／大入秋農作</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>八陣守護城／扇矢四十七本／鏡もろとも夢鶴船</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総合授業録／信州於六穀／學文章</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鉦砲雙葉／初春浪花舞</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>姬濤雙葉／台頭綠色幕</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未分類記事／白石齢／義経腰著状／平井八吉原街</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>加賀見山廻写本／重井筒</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>秋葉撰／雪紡話／神霊矢口渡／高橋徳多／金五貫／後仮名在原系因</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>花雲授業記／奉呈於吉原</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>拳條雙葉／信州於六穀／けいせい青陽館／戸川陣</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>銀纒話／葛紅葉字部谷部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鎌倉三代記／台頭緑色幕</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>銀纒話／葛紅葉字部谷部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>花雲授業記／奉呈於吉原</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>拳條雙葉／信州於六穀／けいせい青陽館／戸川陣</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>銀纒話／葛紅葉字部谷部</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

近世大坂の说教談語芝居における演奏者
| にない社内 | にない社内 | にない社内 | にない社内 | にない社内 | にない社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 | 御霊社内 |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 |
| 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 | 六 |
| ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... |
| 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 |
| 箱根雲観室書刻 | ひろかた盛栄記 | 四本写朝顔草紙 | 宏徳院名在原系図 | 初桜恵愛織 | 花艶式花輪 | しほろは実記 | 鄭島寝題上布 | 花魁言八時 | 倭名在原系図 | 恋娘鏡画姿 | 戻り桜色日赤 | 夏祭花輪 | 置土蔵今織上布 | 復習亀山舞 | 夏いんや | 法眼三段用 | 稲田春雪女容姿 | 日本雛enumerate | 美能音合 | 眠枕花輪 | 寿則三 | 瑋藻前職 | 草能金持 | 伽裟石川楽 | 花筏情水梢 | 伽羅先代秋 | 伽羅先代秋 | 伽羅先代秋 | 伽羅先代秋 |
| 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 |

100
近世大阪の説教調語芝居における演奏者

<table>
<thead>
<tr>
<th>座摩社内</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
<th>いろいろ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>安政</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
</tr>
<tr>
<td>六</td>
<td>三</td>
<td>三</td>
<td>三</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
<td>二</td>
</tr>
<tr>
<td>一</td>
<td>八</td>
<td>五</td>
<td>九</td>
<td>七</td>
<td>三</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>九</td>
<td>七</td>
<td>三</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
</tbody>
</table>

101
| 阿弥陀池内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 | 座摩社内 |
| 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 | 安政 |
| 五 | 三 | 三 | 三 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 一八五八 | 一八五六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八六 | 一八五九 | 一八五九 | 一八五九 | 一八五九 | 一八五九 | 一八五九 | 一八五九 |
| 五 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 | 四 |
| 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 | 吉日 |
| 長柄長者黄鳥鏡／容體出鼻鍱／銀文章 | 花魁香八總／恋梅煙草 | 仮名手本忠臣蔵／姫山姫 | 蒲原伝え手習鑑／隅田川恋幇 | 勝討安楽録／花園兼門篩紫蘇／梅／兵衛／名作切箋書 | 傾城篤紫琴／けいけい石川琴／名筆反魂香 | 賢腕九重錦／花園兼門篩紫蘇／袖柄故錦 |
| ももどり鳴門白鏡／梅曽春魁 | 魚小紋吾嬬雛形／同計略花の吉野山 |
| 敵討安楽録／花園兼門篩紫蘇／梅／由兵衛／名作切箋書 |
| 杉原本桜／与取言千歳／花魁香八總 |
| 箱根霞絵図／與取言千歳／花魁香八總 |
| 敵討安楽録／花園兼門篩紫蘇／梅／由兵衛／名作切箋書 |
| 姫競双葉絵草紙／お染久松色詮事 |
| 柵自来也／八重霞浪花浜花 |
| 敵討安楽録／花園兼門篩紫蘇／梅／由兵衛／名作切箋書 |
| 花魁香八總／恋梅煙草 |
| 花魁香八總／恋梅煙草 |
| 花魁香八總／恋梅煙草 |

102
表2 安政以後 説教説語座に出演した主要演奏者一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>演奏者</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
<th>あ弥陀池文久</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>久保田文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>今村文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>吉川文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>田中文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>鈴木文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>田沼文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>佐藤文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>今井文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>木村文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
<tr>
<td>田中文夫</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
<td>吉日</td>
</tr>
</tbody>
</table>

件数 | 他所出への

103
<table>
<thead>
<tr>
<th>中村 亀吉</th>
<th>板東 伊三郎</th>
<th>中村 新介</th>
<th>田中 茂吉</th>
<th>中村 進吉</th>
<th>花房 半吉</th>
<th>石田 德次郎</th>
<th>中村 政吉</th>
<th>鶴沢 当三</th>
<th>鶴沢 多実信次郎</th>
<th>鶴沢 麓造</th>
<th>鶴沢 豊造</th>
<th>禁沢 勝二</th>
<th>禁沢 修二</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
<td>長 品</td>
</tr>
<tr>
<td>三 味 線</td>
<td>元治</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>元治</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
</tr>
<tr>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
</tr>
<tr>
<td>万延</td>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>万延</td>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
</tr>
<tr>
<td>文 久</td>
<td>万延</td>
<td>文 久</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
<td>慶 応</td>
</tr>
<tr>
<td>元治</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
</tr>
<tr>
<td>万延</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
<td>慶応</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表3 安政以後の説教語語話を発表した演ずる者、談話者、為人等記録

<table>
<thead>
<tr>
<th>演ずる者</th>
<th>ジャンル</th>
<th>役割</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>竹本千代太夫</td>
<td>說教語語話</td>
<td>説教語話述べ</td>
</tr>
<tr>
<td>竹本若夫</td>
<td>説教語話</td>
<td>高校教員</td>
</tr>
<tr>
<td>竹本二木太夫</td>
<td>語話</td>
<td>大学教授</td>
</tr>
<tr>
<td>竹本三木太夫</td>
<td>語話</td>
<td>中学校教員</td>
</tr>
<tr>
<td>竹本四木太夫</td>
<td>語話</td>
<td>小学校教員</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*他所の記載がない人物△他所の奉書に記載上の語話語話

<table>
<thead>
<tr>
<th>元号</th>
<th>記録初年度</th>
<th>月</th>
<th>年</th>
<th>周</th>
<th>天数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文久</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
<td>元</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>極月</td>
<td>二年</td>
<td>元</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*他所の記載がない人物△他所の奉書に記載上の語話語話

<table>
<thead>
<tr>
<th>元号</th>
<th>記録終了年度</th>
<th>月</th>
<th>年</th>
<th>周</th>
<th>天数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文久</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
<td>五月</td>
<td>三</td>
<td>五</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>極月</td>
<td>二年</td>
<td>五月</td>
<td>三</td>
<td>五</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*他所の記載がない人物△他所の奉書に記載上の語話語話

<table>
<thead>
<tr>
<th>元号</th>
<th>記録初年度</th>
<th>月</th>
<th>年</th>
<th>周</th>
<th>天数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文久</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
<td>元</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>極月</td>
<td>二年</td>
<td>元</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*他所の記載がない人物△他所の奉書に記載上の語話語話

<table>
<thead>
<tr>
<th>元号</th>
<th>記録終了年度</th>
<th>月</th>
<th>年</th>
<th>周</th>
<th>天数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文久</td>
<td>二月</td>
<td>二年</td>
<td>五月</td>
<td>三</td>
<td>五</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>極月</td>
<td>二年</td>
<td>五月</td>
<td>三</td>
<td>五</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*他所の記載がない人物△他所の奉書に記載上の語話語話
<table>
<thead>
<tr>
<th>中村兵次</th>
<th>花房留次郎</th>
<th>岩崎二郎</th>
<th>岩崎虎造</th>
<th>岩崎松之介</th>
<th>花房半七</th>
<th>花村久楽</th>
<th>豊沢りん造</th>
<th>鶴沢應造</th>
<th>鶴沢園造</th>
<th>鶴沢春造</th>
<th>鶴沢富造</th>
<th>鶴沢多見次郎</th>
<th>鶴沢小作</th>
<th>野沢小作</th>
<th>亀沢和男</th>
<th>竹本栄太夫</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>長晴</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>義太夫</td>
<td>夫</td>
</tr>
<tr>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>唄</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
<td>三弦</td>
</tr>
<tr>
<td>万延</td>
<td>安政</td>
<td>安政</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>安政</td>
<td>文久</td>
<td>元治</td>
<td>文久</td>
<td>元治</td>
<td>文久</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>万延</td>
</tr>
<tr>
<td>一六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二五</td>
<td>三三</td>
<td>三三</td>
<td>二六</td>
<td>二二</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>三一</td>
<td>二一</td>
<td>三一</td>
<td>二一</td>
</tr>
<tr>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>三一</td>
<td>三一</td>
<td>二四</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>三一</td>
<td>二一</td>
<td>三一</td>
<td>二一</td>
</tr>
<tr>
<td>文久</td>
<td>安政</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>元治</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
<td>文久</td>
<td>慶応</td>
</tr>
<tr>
<td>三六</td>
<td>二二</td>
<td>二三</td>
<td>二二</td>
<td>二二</td>
<td>二二</td>
<td>二二</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二一</td>
<td>二三</td>
<td>二一</td>
<td>二三</td>
<td>二一</td>
</tr>
<tr>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
</tr>
<tr>
<td>九</td>
<td>一六</td>
<td>五九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
<td>九</td>
</tr>
<tr>
<td>八</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
<td>一〇</td>
</tr>
</tbody>
</table>

106
|       | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 | 板倉次郎 | 中村末次郎 | 三村次郎 | 遠藤次郎 |
|-------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-------
興行傾向

まずは、興行数から考えてみると、もちろん残存率○%ではないため、正確ではないが、そこから興行の傾向を見出している。

同時期の大坂全体の当付点数は四三二点である。当付を示す限り、明らかに概略諸座であると判断できる芝居数は全部の約三三％で
あることがわかる。表1からも分かる通り、概略諸座として判明
している番付のほとんどは、御霊・座摩・稲荷・阿弥陀池の各劇場
の芝居である。これらの芝居は寺社の領域内で行われるため、一般的
に宮地芝居と呼ばれる。

大坂で芝居興行が正規に許可されている、すなわち大芝居である
宮地芝居はそれより格下の、晴日百日興行、つまり三月程度に一
回申し立、許可されたものののみ上演ができるという形式の芝居であ
った。

一方、宮地としては、概略諸座と和光寺の芝居が記載されているが、他
の新地の別に、概略諸座と同格であると同時に、大阪の大芝居における歌舞伎興行の重要な一役を占めていたことは間違
いない。

教説諸座のものであると判断できる天満の番付は二点しか存在しな
かった。現時点での確認状況であり、今後もう少し変動する可能性
はあるが、劇的に増加する可能性も捨てられない。

一方、宮地としては、概略諸座と和光寺の芝居が記載されているが、他
の新地の別に、概略諸座と同格であると同時に、大阪の大芝居における歌舞伎興行の重要な一役を占めていたことは間違
いない。

他、天満神社への役者名が記されていったが、実際には明らかに説

4・2 音曲の種類

「関東丸神社文書」では、幕末期に新地で含めた地域の支配をう
たい名代まで配置しているものの、実際には上記のように依然と
してほぼ宮地のみで興行していたということになる。また、名代の
他、天満神社への役者名が記されていったが、実際には明らかに説

108
近世大阪の説教舞踏芝居における演奏者

4.3 演奏者の出場傾向

表3と表3、すなわち説教舞踏座における演奏者の出場傾向を示した発表者と、説教舞踏座以外の芝居（以下「一般」と表記する）の演奏者とを比較すると、説教舞踏座以外の芝居では、芝居に出演して一般の芝居には出演しないという傾向が示される。発表者の中には、説教舞踏座と一般の芝居の出演を両方に行っている者もいる。一方で、説教舞踏座以外の芝居には、演奏者が参加しないとされる例も見られる。

また、一般的に説教舞踏座では、演奏者の出場傾向を示す傾向が見られ、発表者の出場傾向よりも、一般的な芝居での出場傾向が強くなる傾向がある。

中村次郎・村中源吉、田中勇吉の三人、長崎の町人では、石田次郎・花房半吉・鶴沢次郎の三人、長崎の町人では、石田次郎・石田喜一郎、花房半吉・松岡次郎の四人、合計八人である。

なお、表3は五国以上出場した主要演奏者であり、全員分にはないため、データから調べてみると、同時期の他の芝居では出場頻度が低いものもある。この時期の番組で、説教舞踏座の番組を除いた二十二点中、一度も前回が記載されていないとあることが、この時期の番組において出場が困難なと考えられる。
中人、三弦が一人中三人の合計二中五人であるのに対し、
長唄が八人中五人、三味線が九人中四人の合計七人中九人であ
る。固有の明みて七人中九人がある。倒長唄と合わせて七人中九人で
ある場合が多い。一方、長唄は固有・準固有の演奏者が多いことわ
かる。また、演奏者の中にはすべて、长唄の呪に相当。一方、
一般の出場回数が八九台で、一般でも活躍している人物で
ある場合が多い。一方、長唄の呪には演していないことがわかる。ただ
し、長唄の三味線、教鈴たちは共通の演奏者を占めているとい
う状態である。芝居番付の中を判断するのは難問であるが、
この結果から、長唄の呪においては、すべての出場回数の少ない
人物、逆に最も出場回数が多い固有・準固有と通共の区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。以上のことから、義太夫節に関しては、あまり一般との区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。以上のことから、義太夫節に関しては、あまり一般との区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。以上のことから、義太夫節に関しては、あまり一般との区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。義太夫節に関する限りは、義太夫節と一般の呪の方が中間的な状態で、
義太夫節は固有・準固有と通共の区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。以上のことから、義太夫節に関しては、あまり一般との区別はな
く、堀教鈴たちは一般の歌舞伎にしても出演する者がほとんどであ
る。義太夫節に関する限りは、義太夫節と一般の呪の方が中間的な状態で、
近世大阪の説教語芸居における演奏者

図2 説教語芸座 義太夫節 太夫一太夫 1回以上 共演関係図。●は義太夫節の太夫を表す。

一と二が共演関係を示しており、太夫同士の中では一番関係が深いといえるだろう。ただし、三回の共演関係は、ここでは最も多いが、全体として決して多いとはいいえない数値である。すなわち、太夫同士はあまり関係性を示さないといえ
るだろう。

グループ形成に他の要因がないか、それぞれの出演前後をみたが、一カ所ではなく複数の劇場で共演する傾向を示す者が多く、そこか
かえる二人の方の太夫は、劇場は異なるものの一カ所の劇場にしか出演
しないという、同様の傾向を示す共通点がある。他の太夫の傾向と
形が異なる、太夫あるいは三弦が何人も名を連ねて記載される
方法が挙げられる。義太夫節は太夫と三味線が一人ずつ記載される
ことにならない、太夫同士の関係性があまり見えてこない原因として、番付の記載
が挙げられる。固有の三弦方である鶴沼富造は、固有の細沼呂を
を示すが、義太夫の三弦太夫で1回以上共演関係にある演奏者同士の
関係図である。固有の三弦方である鶴沼富造は、固有の細沼呂を
次郎と二回の共演関係を示している。また固有の竹沼富造は、固有の鶴沼呂を
が出現しているが、そのほとんどが太夫と太夫に一回ずつの関係で
あり、二回以上にした時点で鶴沼富造と鶴沼呂市のグループしか図

111
図5 説教講義座 義太夫節 太夫ー三弦 2回以上 共演関係図　●は義太夫節の太夫、◆は義太夫節の三弦を表す。

図6 説教講義座 義太夫節 太夫ー三弦 5回以上 共演関係図　●は義太夫節の太夫、◆は義太夫節の三弦を表す。
図9 説教語座
長巻 崎一郎
7回以上 共演関係図
■は長巻の巻を表示。

図10 説教語座
長巻 三味線三味線
1回以上 共演関係図
■は長巻の巻、▲は長巻の三味線を表示。
しかし共通・固有・準固有の混合グループのままである。そして呪
で、五回という、他のグループよりもかなり強力な関係を示す。
長めでは、番付上の記載が連名であることが多い。
比較的共演関係を見出し易いという性質があるが、そもそも出
村長は誰とも共演関係を示さず、また準固有同士の関係が強力で
あるなど、長呪特有の特徴が見出せるといえるかもしれない。また
別な見方をすると、左のグループは、田中勇吉が関係しているもの
の、図9で外れ、完全な中村姓のグループになる。つまり中村姓グ
ループと、花房・石田グループとも合して考えたいたい。これについ
ては、三味線同士、呪と三味線とも合して考えたいたい。

4 4 5 長呪 三味線同士

図10は長呪の三味線同士の二回以上の共演関係図である。三味線
同士はそれぞれ固有の石田喜一郎と共通の板東伊三郎、準固有
の中村亀吉と共通の中村新介という組み合わせであり、どちらも混
合グループといえるかも知れない。つまり、長呪の同士は、劇場によ
ってはっきりに分割されていることが判明した。呪によるグルー

近世大阪の説教語義語における演奏者

図11 説教語義語 長崎 唄一三味線 1回以上 共演関係図 ■は長崎の喫、▲は長崎の三味線を表す。

図12 説教語義語 長崎 唄一三味線 4回以上 共演関係図 ■は長崎の喫、▲は長崎の三味線を表す。

4・4・6 長崎 喫一三味線

図11は長崎の喫と三味線の一回以上の共演関係図である。最初の喫は三味線の一回からを示す関係図においても同様であった。喫と三味線についても存在する二つのグループは、上の五人組合グループであるが、上に固定する二つのグループは、三味線同士でも共演関係を示さなかったが、喫と三味線についても同様であった。長崎の喫と三味線一回以上の人々の関係を示すことができる。
図13 説教課座 長明 呪一三味線 10回以上 共演関係図 は長明の呪、 は長明の三味線を表す。

図14 説教課座 長明 呪一三味線 12回以上 共演関係図 は長明の呪、 は長明の三味線を表す。

この2つのグループの関係は関同士、三味線同士でも見られ
た形であり、おそらく呪による
グループ構成という見方があると
考えられる。この後大きく動くのは四回以
上の図12で、下のグループから
村久、小川倉三郎の2名が
分離し、三つのグループになる
ことだが、この関係も四回まで
に出た村久、小川倉三郎の2名が
が出て緩かに人数が減少しな
がら、図13、 10回以上の関係
ながら、図13、 10回以上の関係
がで、6回以上の関係図でそれぞれ二名ずつ
に
図13に図14に残った人物のうち、花房冬吉・石田徳次郎・中村亀吉の三人は準固有ivec関係で、板東伊三郎・中村政吉・中村新介は共通である。

図14では四名のうち準固有の内、板東伊三郎のみとなる、他三人は共通の演奏者である。以上のことから、次郎が準固有の演奏者であるかどうかを示しておろう。

そこで図14で、それぞれの番付記載状況と共演関係を分析し、明快な編成が見出せるのである。

共演関係からみた演奏者組織

図12において、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。

一方、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。

一方、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。

一方、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。

一方、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。

一方、川村の稲荷グループと玉村・小川の座摩グループを示すもので、双方の関係を示すもので、準固有の演奏者の可能性が見出せた。しかし、彼らはその枠同士で共演する演奏者の可能性が見出せなかった。また、稲荷・玉村・小川の三名が座摩グループが分かれる傾向を示した。図10の上の花房、石田、東東グループは川村、稲荷が含まれていない者であり、以下の中村の稲荷グループは稲荷とは無関係に共演している者である。
ある程度の様み分けをしていった可能性も模出できた。それは流派をもって演出する可能性も否定しないことが推測できるが、あくまで変えて出演する可能性も否定しないことが推測できるが、あくまで

5 演奏者分析からみた説教説語

以上、説教説語に演出した演奏者については検証した。これらをみた説教説語

説教説語座は、本来子供芝居を上演する団体であり、図1の番付

をみても分かるとおり、説教説語座であることを前篇に打ち出して

興行している。ただや一般の芝居は、たとえ宮行で行われていっても

説教説ではない。団体としても把握する上部組織としての説教説

語と一般的歌舞伎は形態が異なっているはずである。しかし、実質

的には同じような歌舞伎を行っていた前篇で考察した通り

であった。一般と説教説語とで行っている内容に相違がないならば、

用いられている音楽に関して大きな異同はないと言える。実際に番付

からも、その点に関して裏付けられた。

固有・準固有的演奏者が抽出できたが、彼らがどの範囲で共演関

係を示さず、一般的歌舞伎と同様であることが名前からも推測される

ことが分かる。この点からも説教説語座が一般的歌舞伎と同様であることが

分かる。

固有・準固有の演奏者が抽出できたが、彼らがどの範囲で共演関

係を示さず、一般的歌舞伎と同様であることが名前からも推測される

ことが分かる。この点からも説教説語座が一般的歌舞伎と同様であることが

分かる。

一方、長唄に関しては、義大夫節とは少々状況が異なることが判

義大夫節の太夫名を名乗る。名をみると義大夫節の太夫名と酷似している者が多く、義大夫節の太夫が姓
近世大阪の説教談語芝居における演奏者

明治たち。姓によるグループ性と劇場別の活動状況の分割がみられた

のため。すなわち、一定のグルーブが特定の歌舞伎興行と関係す

るという。組織としての関係性が存在するということになる。姓に

よる組織の存在は推察において考察しているが、今回の分析で説教

座敷においてもその組織が有効である、かつ劇場によって姓によ

るグループがいまさかいに説教談語を有効である」という傾向は例示される。しか

し個人の動向でみれば、説教談語以外にも出演する者が多くみられ、

また固有の演奏者同士のみでの共演関係を示さないことから、やは

り一般的の歌舞伎との間に完全な断絶はないことも判明した。これは、

個人としての座敷契約ではなく、組織としての座敷契約の可能性を

示すものと考えられる。

ただ、経験一般の歌舞伎で非常に活躍している者の見出しが難かった。

このことから、長唄においては一般的歌舞伎と説教談語座敷における

役者の説教談語に多く出演するという傾向である。すなわち説

教座敷への出演、長唄の場合は演奏者のランクを示しやすいと

いうことである。したがって「差別」とは感じられない。さ

ば存在するのではないかと考えられる。

以上、演奏者の存在形態を見る限りにおいて、説教談語座敷と一般

の歌舞伎の間には「差別」的な傾向は見受けられなかった。このこ

の説教談語座敷に関する差別がないとは言い切れないが、少な

きと説教談語座敷における差別がないとは言い切れないが、少な
今回の分析は天保改革後の一〇年間に限定しているため、この傾向が天保の改革を経た結果なのか、史料的な問題なのかを厳密には明らかできない。しかし、前橋で考察された天保改革期からの说教語座の躍起と、その後の状況の変化と今回の分析結果の方向性は同軸であり、それは実態面から詰詰めえたものと考えられるのである。

今回は演奏者のみに焦点を当てたため、また解説ししていない要因が存在する。今日の課題として、さらなる役者や名誉等との関係、または人形浄瑠璃との関係を見っていくことによって、演奏者の組織編成の要因に関する解説を試みたい。それによって説教語座の特質、一般の歌舞伎との差異、このような状況でもわずかに説教語座を名乗る意味などをさらに考えていく。

注

[1] 京都・大阪を中心とした文化圏。
[2] 合田嘉徳、「一九九四、中世民芸と民芸民の研究」、東京、雄山閣出版。
[3] 小木原、「木原、一九八四、都市文化史」
[4] 木原、一九八〇、都市文化史と芸能興行、大阪市立大学、「一九八四」
[5] 木原、一九八〇、都市文化史と芸能興行、大阪市立大学、「一九八四」
[6] 室本弥太郎、八〇〇〇、関西・東京の文化史、光文社、「一九八四」
[7] 斎藤利彦、「一九九四、近世後期の大坂の屋敷居と三井寺（含）質疑・討論、「ストリット」一九七八八、大阪、大阪歴史学会、「一九七八八」
[8] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[9] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[10] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[11] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[12] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[13] 神田由乗、前掲文、「一八八四」
[14] 神田由乗、前掲文、「一八八四」。
近世大阪の説教説語芝居における演奏者

15. 棚町彌彌恵、『九九九』、吉水孝雄旧蔵、五世竹本弥太夫、木

16. 武内恵美子、『一〇〇』、時田アリソ・働田治子編『日本の語

17. 説経の免状が更新制であったのかは、『関剣丸神社文書』でも

18. 神田由築、前掲書、一四六頁、表2、表3 参照。

19. 一つの劇場で一月から一〇月までの間の一年間に借用七回

20. 宗見中の芝居番付のうち、名代に『説教説語』と記載されている

Niの他に、記載された名代名が明らかに説教説語座の者である

21. 斎場について説教説語座の興行を行ったものとして算出した概算、八カ所×年七

回×一年間、記録されたすべての人物を記載するか煩駐になるため、五回以

22. 宮古路高後家を関祖とする浄瑠璃の一派、大夫の名乗った姓か

23. 武内恵美子、『一〇〇』、歌舞伎座子方の楽師論的研究、近

世上方を中心にとして一、大阪、和楽書院。